

大分県俳行脚における漱石の足跡

小 野 茂 樹

明治三十二年一月一日、五高の教授として熊本に居た漱石は坪井町の自宅を出発して、かねての念願であった大分県への旅を試みた。五高の同僚奥太郎がこれに同行した。

一月二日に漱石は宇佐駅に着き、そこから宇佐八幡宮へと向ったが、当時は今の日豊線を豊州鉄道と云っていた時代で、その終着駅であった宇佐駅というのは、今の柳ガ浦駅に当る所にあった。漱石はそこから歩いてかなりの距離（約四キロ）にある宇佐八幡宮に参詣したと考えられるが、神宮へ近づく頃はすでに日暮れになっていた。

漱石はその夕暮れの神宮で数句の俳句を詠んでいるがさてこの夕方、神宮に参詣した以後、漱石はどちらの方向へ歩いて行ったのか、その後の足取りについて諸説がある。次にそれについての三つの説を取りあげてみると一、その夜は宇佐神宮近くの宿屋に投じた。二、宇佐駅（今の柳ガ浦）の方へ引き返して、当夜はその辺の宿屋に泊り、翌日宇佐駅から豊州鉄道で中津へ行き、中津から耶馬溪入りとなった。三、参詣後、法鏡寺、四日市方向へと進み、四日市に一泊して、翌日は耶馬羅漢寺へと向った。というものである。

右の三説について私見を述べるならば、まず第一の、当夜宇佐神宮付近の宿屋についたという説は、妥当を欠ぐものと思われる。その理由は、漱石は実はその日、神宮に参詣したのち、ある宿に投ずるまでの間に、次の七つの句を詠んでいるのである。

灰色の空低れかかる枯野哉
無提灯で枯野を通る寒哉
石標や残る一株の枯芒
枯芒北に向って靡きけり
遠く見る枯野の中の烟かな
暗がりに雑巾を踏む寒哉
冬ざれや貉をつるす軒の下

これによって見るとき、漱石は神宮に参ったあと、すぐに宿につかず、枯野の道をしばらくの間、暗くなる頃まで歩いて、ある宿に投じたことが考えられる。つまり宇佐神宮近辺の宿にすぐ投じたという様子は、右の俳句からは全く感じとられないのである。とにかく漱石は参詣後の夕景の道をかかなりの時間にわたって歩きつづけている。しかもそれが枯野の道である。

次に第二の説について考えてみる。常識的に考えるならば、この第二説が最も有力だと思われるだろう。漱石の大分県への旅はこれが初めてであったし、しかも神宮に参詣した頃はすでに夕暮れようともしている。そして宇佐参拝の次に漱石が訪ねようとする所は（この旅の句によって十分に知り得ることであるが）耶馬羅漢寺であった。このような条件に立って考えるとき、漱石は今来た道をもとの宇佐駅の方へ引き返して行き、当夜は（翌日豊州鉄道によって中津へ行くに便利な）宇佐駅辺の宿屋に投じたであろうことが、強く考慮されるところである。初旅の者が、折から夕暮れ迫る真冬の道を、地理不案内な方向へとむかうことは、常軌を越えたことのように思われるであろう。

しかしこれについて私の結論を先きに述べるならば、私はこの第二説よりも、次の第三の説、つまり漱石は参詣のあと四日市方向へ進んで行った説を妥当と考えるのである。

それを決定づける理由の第一は、当時の地形である。前記したところの、漱石の「枯野の道」に関する句は、十分に重視されねばならぬからである。これについてこの地方の当時の地形にくわしい幾人かの古老に尋ねたところ、どの人の答えもおおよそ次のごとくであった。一、神宮から宇佐駅までの距離と、四日市までの距離とはほぼ同距離（約四キロ）である。二、神宮から宇佐駅に至る間の両側は、ほとんどが稲田であった。三、神宮から法鏡寺——四日市へと通う道、とくに法鏡寺までの約三キロは大体が坂道（縁なし坂など呼ぶ）であって、その両側は田、畑、山などの混合で、野道と云える風景は十分に考えられる。

右によってみると、地形的には宇佐神宮から法鏡寺四日市への方向が、漱石の俳句の内容にもっとも合致するものであることが考えられる。そして次にまた、当時の四日市は、いわゆる市場として栄えた所で、地理不案内な方向とは云え、人通りのある街道すじに当り、そこには幾軒かの宿屋もあったこと、さらに次の目的地の羅漢寺へ行くにも有利な方向であったことも併せ考えることができる。以上の理由に立って、私は漱石の神宮参詣後の足取りとしては、第三説を妥当とするのである。

翌三日は、漱石は羅漢寺を訪ね、そこでまた、

閑や岩に取りつく羅漢路

釣鐘に雲氷るべく山高し

巖頭に本堂くらき寒かな

などの十句を連作しているが、その中には、

巖端に廊あり藁を積むこと丈余繁僧一人其端に坐して風の吹くたびに千丈の崖下に落ちんとす其居の危きを告ぐるに平然として曰くいのちは一つじゃあきらめて居りますと忽然鳥巢和尚の故事を憶起して

雑僧の只風呂吹と答へけり

というような、長い前書きのついた句もある。これは後の漱石の小説「草枕」の中に出てくる観海寺の禅坊主を思わせるような愉快的場面であるが、鳥巢和尚とは中国の名僧で、名は道林、杭州の人、常に秦望山の枝葉繁茂する樹上に棲んでいたので、時人これを鳥巢禅師または鳥窠禅師と云った。元和中、杭州の知となった白居易がこの鳥巢禅師に謁したとき、「師の住所甚だ陰なり」と問いかけたところ、禅師が「大守の危険ももっとも甚だし」と答えたので、ふたたび白居易が「弟子、山河を鎮す、何の陰かあらん」と云うと、「薪火相交り、識性停らず、陰にあらざるを得んや」と禅師にやりこめられ、その後禅師に心服して道を乞うたという故事もある。漱石は危険きまわる巖端に平然と坐す僧に、危い樹上をわが棲所とする鳥巢和尚を思いくらべ、興をよせたわけであろう。以前に参禅の経験もあり、禅にとくべつの関心をもっていた漱石の面目が、ここにも少々発揮されているように思う。

漱石はその日、三日の夜は「口の林」（今の耶馬溪村平田）に宿をとったが、その時の

短かくて毛布つき足す蒲団かな

泊り合す旅商人の寒がるよ

寝まらんとすれど衾の薄くして

などの句も、街道宿の情景が出ていて面白い。

ところでここに漱石が、宿の蒲団が短かく寒いので、毛布をつき足して寝たという、その毛布は、あるいは漱石自身がこの旅のはじめから持って来たものではないかという気がする。それは、この旅のも少し先きの方、漱石が日田から筑後川の上流を下って吉井から「追分」という処を通るときに作った句に「親方と呼びかけられし毛布哉」というのがあって、折からの吹雪で漱石が毛布をかぶって歩いていたのを、車夫どもに「親方乗って行かん喃」と呼びかけられた図であるが、これについて小宮豊隆の「夏目漱石」の中に、

『坊ちゃん』第三の中に「二年前ある人の使に帝國ホテルへ行った時は錠前直しと間違へられた事がある。ケットを被って、鎌倉の大仏を見物した時は車屋から親方と云われた」という一節がある。漱石が大学生の

時分、ほんの少しばかり大学の教師をしてゐたオーガスタス・ウッドが、初めて自分を訪ねて来た漱石を錠前屋と間違へたという話は、既に有名であるが、漱石が車屋から「親方」と呼ばれたといふのは、実は「鎌倉の大仏」ではなく、この「追分」で経験した事だったのである。九州の田舎では、少くとも明治三十五・六年までくらいは、多くの人は雪の降る日に、赤だの青だの毛布を頭からかぶってあるいてゐたのではないかと思ふ。

とあるが、『坊ちゃん』の小説につながるその毛布は、あるいは前記の、口の林の宿での句に出てくる毛布と同一のもではなかったかと思われもするのである。

口の林で泊った漱石は、いよいよ耶馬深溪の奇勝中を過ぎてゆくが、「耶馬溪にて」という前書きで「頭巾着たる獵師に逢ひぬ谷深み」以下六句、「溪山幾曲愈入れば愈深し」の前書きで一句、「山は洗ひし如くにて」の前書きで、

風の吹くべき松も生えざりき

風の峯は剣の如くなり

など八句を連作している。その中には「目ともいはず口ともいはず吹雪哉」というのもあって、この辺から吹雪にも見舞われている様もうかがわれる。

四日の夜は、守実泊っている。

守実に泊りて

たまさかに据風呂焚くや冬の雨

せぐくまる蒲団の中や夜もすがら

薄蒲団なえし毛脛を擦りけり

家に婦人なし之を問へば先つ頃身まかりて翌は三十五日なりといふ庭前の墓標行客の憐をひきてカンテラの灯の愈陰気なり

僧に似たるが宿り合せぬ雪今宵

さて、この守実で漱石が泊った家がどこの家であったかについて調べてみた結果、河野謙吾という人の家（現戸主、河野正利氏）であったことに間違いのないようである。右にあげた俳句の詞書中に、この家に婦人の姿を見かけなかったということと、この家の婦人が死亡して、漱石の泊った日（明治三十二年一月四日）の翌日が、その三十五日目に当たるということを手がかりに、明治当時の戸籍について調べた結果、河野謙吾さんの家に該当することが明らかになったわけである。

これについて今少し詳しく述べると漱石訪問の時、戸主であった河野謙吾さんの父運平という人はすでに死亡しており、また母（養母）であるナカという婦人は、漱石の訪れた二年ほど前に実家に復帰して、この家には居なかった。そして亡くなってから翌日が三十五日目になるという婦人は、すなわち謙吾さんの妻「スミ」と

いう人に当る。この人の死亡年月日が明治三十一年十二月三日であって、その日から計算すると、漱石の泊った翌日、三十二年一月五日が三十五日目になる（初七日だけは六日目をもって当てる）ところから、前記の詞書の内容と完全に一致することになる。現戸主河野正利氏（前守実郵便局長、現教育委員）の話では、当家は守実の旧家で明治七年、祖父運平さんの代から郵便局を開いていた。従って漱石の立寄った時も郵便局であったわけだ。その時から幾分の増改築はなされてきたが、現在母屋だけは旧観をとどめている。（藁葺二階屋）現在は郵便局をやめているが、当時は階上階下合せて八部屋あり、階下の部屋の一つ（道路からの入口に面した部屋）が郵便局に当てがわれていたとのことだ。河野家の東隣りは大歳神社という石鳥居のある神社、漱石はこのお宮の前を過ぎて河野家に投じたわけであるが、「庭前の墓標行客の隣をひきて……」の庭前は、ここに増築された建物のために、その昔の景色を見ることはできないが、そこには小池なども造られてあったとのことだ。

翌五日は吹雪となったが、漱石は相変わらず元気で、足袋、鞋ばきの姿で、守実から伏見峠を越えて日田へと向った。そしてその時の句のなかには「峠を下る時馬に蹴られて雪の中に倒れ」て、「漸くに又起きあがる吹雪かな」などの愉快なものも加っている。

日田では広瀬淡窓門下の詩才、平野五岳をしのぶ句を作ったりしているが、それから筑後川の上流を下って、吉井、追分と過ぎ、久留米をへて熊本に帰りついたのであった。

宇佐、耶馬、日田というような長途の俳行脚は、漱石にとって最初であって、これが最後であったと云えるが後年漱石が南画に興味をもち、自ら彩管をふるうようになったのも、この旅の感銘に負うところがあったと考えられる。そう云えば、「つまらぬ句許りに候然し紀行の代りとして御覽被下度冀くは大兄病中痾霞の儼万分の一を慰するに足らんか」との言葉をそえて、この句稿を松山で静養中の正岡子規に送った大分旅行の場合は、その他の場合のほとんどが、ただ句だけを列記して送っているのとは様子がちがって、題詞や長い前書きあるいは後書きなどが各所に書き添えられてもあって、この旅における漱石の積極的な意図や感銘度のつよさを感じさせられるようである。